

Title	人生の意義及価値 ( 其四 ) : ルードルフオイケンの新人生観
Sub Title	
Author	川合, 貞一
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.3, No.4 (1910. 4) ,p.431(65)- 440(74)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100415-0065">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100415-0065</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

64 々見る所なるが故に、固より異とするに足らざれども、爰に二箇の異例と認む可きものあり、其一は、右の表中、波斯が一九〇三年に結びたる通商條約第五條は、波斯が英國にて税關の手續に關し最惠國の取扱を享有する旨を規定したるものにして、隨て此最惠國條款の權利者は波斯にして、義務者は英國なるが故に、同じ片務條款にても、文明國が未開國に對して、片務の地位に立つの形を呈し、實際は兎も角も、諸國の條約中に多く見當らざる一種特異の條款なること。其二は、トンガの條約第二條は、相互に最惠國の取扱を約しながら、トンガが英國より享有する取扱は、單純條款の定式にて規定するに反し、英國がトンガより享有する取扱を、無條件條款にて規定したること是れより。此二例は今日各國の最惠國條款の慣例に稀有の異例を添ゆるものなるを以て、爰に特に附記して研究の資料に供するものなり。

## 人生の意義及び價值

(其四)

(ルードルフオイケンの新人生觀)

川合貞一

人生の何物たるかを概觀せようと云ふには先づ人間の生活が他の生活の形と異なる所以のものに眼を着くべきである

吾々の知る限りに於いては人生が生活の頂巔を形成つてゐることは何人も疑を容れない所であるが然かし其の優越してゐる點は那邊に存してゐるかの疑問となると古から意見確信が一致してはゐない或者は人間の生活も動物のそれと連續したもので其の異なる所は唯根本的性質の多少に在ると信じ又或者は人間の生活を以つて全く異つた新しい生活だと信じたのであるで前者に従ふと人間の生活も動物の生活から漸次に發展し來つたものだとすることが出来るが後者に

66 従ふと人間の生活を動物のそれから導き出すことは全く出来ないことになるのである

十九世紀以前に於いては多くは人間を以つて萬物の靈と考へ人間は其の特有な精神生活に於いて全く他と懸離れたものだと思はれてゐたのであるがそれが近代に至つて根本的に一變するに至つたと云ふのはまづ第一に科學が起つて來て人間は決して孤立したものでなくして自然と結び付いたものである否自然と云ふ大きな機關の一部に過ぎないものだと思はれるに至つた而して種々の運動がこれに加はり遂に人間の精神生活をも自然の連續に外ならずとして了ふやうになつたのである一方に於いてはまた實際的生活の趣が變つて環境に對する關係が益々重大となり盛んに自然力を使ふやうになつたのであるが其の自然力なるものが利用せられながらも人間に對して勢力を得て來たのである而して從來輕視されてゐた生活の物質的方面と云ふものが今日に於いてはあらゆる發達の缺く可からざる基礎となり生活の困難を除き去れば一般の向上内的發展が出来るものともまで信せらるゝに至つたすべて此等が人間は全く自然の一部で個人

の生活も社會の生活も等しく自然力によつて動かされ自然法によつて支配されてゐることを示してゐるやうに思はれる所から在來の人生觀が全く轉倒するることとなつたのである

吾々が自然に屬してゐることは疑ない事實であるが然かし果して自然の中に躡踏してゐるものであらうか決してさうではない惟うに人間は思惟に於いて既に自然を超越する蓋し开が環境を認識するに方つても決して與へられたるまゝに之を描き出すのではなくして之に加工變形を施し統一を與へるのである而して思惟と云ふものは時間に制限せられない所から萬物を永遠無窮の形の下 (specie eternitatis) に理會するつまり眞理には古今なしであるそこで限りある自然生活と云ふものがつまらぬものと感ぜらるゝに至るのであるこれは思惟の獨立が發展すれば發展する程益々甚しくなるやうに思はれる何故かと云へば思惟がひとり立ちをするやうになるに従つてあらゆる自然は常に思惟に由つて吾々に働を及ぼすことが出来るのみで現實性を有してゐないものだと思ふ事が益々明かになつて行くからであるかくて思惟は自然の世界を益々遠方に押遣り之を陰



68 影の世界と化して了ふそこで堪ふ可からざる矛盾が起つて來るのであるが思惟なるものが自然に對して新世界を打建てる程に有力でない所から云はゞ人生が中空に懸つてゐるのである現時の經驗は明かに之を示してゐると云ふのは一方に於いては物質的工藝的文明が未曾有の發達を爲して吾々と環境とを幾様にも結び付け爲めに吾々は現實の堅固な地盤を得たやうに思はれるが又一方に於いては近代の生活に於いて自由な考察が非常に發達した所から全く自然に服従することを許さないことになつたかくて吾々の生活は兩分されて存してゐるのである

そこで疑問が起つて來ると云ふのは一體人間は思惟よりも一層特有なるものを有つて居りはしなからうか思惟の背後には一層汎く一層深くして其れに力を與へる所の生活が存して居りはしなからうかと云ふことである實を云へば種々の現象はかゝる生活の存することをほのめかしてゐる

人間と云ふものが自然に屬してゐる限りに於いては其の行動は全く自家保存の本能の支配を受け何事も其れから割出さるゝのであるが然かし之れが爲めに

決して環境から引離されて了ふ譯ではない何故かと云へば自然の機制の上から云つても他人の幸福を進めずして自分獨り榮えることが出來ないからであるそこで家族も民族も否全人類も自分の利害關係の中に入つて來ることになるのであるさうなると遂には自家保存の爲めではなくして他人自身の爲めに他人が價値あるものと見えるやうにもなつて來るのであるが是れはほんの假に過ぎないものであると云ふのは自然の秩序では全く自分の利益を捨て、了つて他人の爲めに盡すと云ふやうなことを許すものではないからである若しさう云ふことが實際生活に存してゐるとするとそれは既に自然を超越したものである凡そ人間の共同生活と云ふものは唯個人が相並んで多様の關係に立つてゐるばかりではなく家族に於いても國家に於いてもはた全人類に於いても内的關聯を生じ特有な内容及び財寶を具へた生活圏を生ずる而してそれが個人の目的を超越して異つた感情と努力とを惹起すが如く其の要求がまた個人的自家保存のそれと正しく矛盾することがあり得るのである若し自分の利害と全體の利害とが衝突すると云ふやうな場合にはおしなべて云へば自分の利害を主とするにしても亦之を犠牲

70

に供して喜んで公に徇ふと云ふことも爲し得るのであるかう云ふ可能性を吾々が有してゐるのを見ても吾々の生活が自然を超越することが分る

それからして又事物に對する新しい關係の成立が吾々の生活の自分一個の利害關係を離れることを示してゐる自然の範圍内に於いては吾々の外に横つてゐる所のはすべて自分の幸福を進める手段器械としてのみ價值を有してゐるのであるで事物が其れ自身の内容上からして吾々を引付けると云ふやうなとは解すべからざることである所がさう云ふ關係は人生の到處に存してゐるのである勤勞に見るもさうである其の始めには生活の必要に餘儀なくせられて止むを得ず仕事に従事したものであるがそれが漸々面白くなつて遂には仕事の爲めに仕事をすると云ふやうにもなつて來るのであるさうなつて來ると勤勞は最早外から課せられた強制ではなくして吾々の自由の左券と感ぜられるやうになる勤勞は職業を生じ文化生活を生ずるかゝして吾々の利害關係に優越した世界が出來て來るのである

生活が獨自一個を離れて擴大せられると共に自存の内界が發展して來る自然

の階段に於いては生活なるものが環境に對する關係に盡きてゐるが如く人間に於いてもやはりそれに束縛せられてゐるのであるで精神生活も決して感覺や慾望から引離すとは出來ないのである従つて内界の獨立及び特有な内容の發展は全く不可能のやうに見えるが然かし人生の經驗は其の然らざることを示してゐる即ち思惟が發展して來るとそれが生活を指導するやうになり宗教も道德も法律も全文化生活も益々精神化され内界は環境に對して獨立を得るのみならずこれに變形を與ふるの勢力を得るやうになる蓋し思惟の力と云ふものは聯合とか習慣とか云ふ物的の力とは根本的に異つたもので一言以つて之を謂へば統一にあるで吾々の思想界に於いてもまた吾々の生活状態に於いても何か矛盾が存してゐるとそれが堪へられないやうになりそれを除くが爲めには劇烈な運動をも喚起するやうになるこれはつまり精神が我を喪はざらんとする所から起つて來るのである即ち精神の自家保存なのである

かう云ふ運動が如何に深く人生に侵入するかは所謂史的觀念ケレトリイヘイデーなるものが特に明かに之を示してゐる歴史を繙くと折々ある思想ある生活運動が起つて來て人



をして翕然として之れに歸向せしめるのを見ることが出来る蓋しかゝる思想の  
かる生活運動は絶對的服従を要めるものであつて個人の利害關係のみならず全  
階級の利害關係すら顧慮することを許さないのであるそこで人生には特有な方  
面の存してゐることが分る即ち人生に於いては人間の利害禍福に頓着なく絶對  
的要求を以つて其の途を進む所のあるものが現はれて來るのである要するに生  
活なるものは環境に對する關係に盡きて了ふものではなくして内的任務が其の  
中より生じて人間の存在にまづ價值と品位とを與へるのである

かくの如く生活が自在と自家運動とを得て自然を支配する所の實利實益を越  
越することとなつて來る廣義の道德的要素はすなはち茲に存してゐるのである  
この道德的要素が人間の道德的自家判斷即ち良心と云ふものに於いて獨立な發  
展を遂げるのである蓋し良心なるものは或人の信するやうに人間を懸離れたも  
のでもなければ又共同生活に於ける習慣及び相互順應の結果でもない無論良心  
には外から來たものが附加はつてゐるにしても其の根本的要素はどうしても外  
から來たものとして説明することの出来ないものである若し吾々の生活が全然

環境に依屬して内からとは何の運動も起つて來ぬものとするとは道德上の命令  
を獨立的に承認獲得し行爲に對して内的責任を感ずる抔云ふとはあり得られな  
いことになつて了ふのである而して内容の上に於いても判斷は全く社會的環境の  
状態に束縛せられて了つて一步も其上に出づるとは出來ぬことになるさすれば環  
境と衝突するが如きとはあられない譯であるが事實は決してさうでない隨分個  
人が道德上の確信よりして社會が擧つて非とする所のものでも之を是とし社會  
が擧つて是とする所のものでも之を非とすると云ふやうなことがあるのであるか  
う云ふ社會的環境に對する個人の反抗が道德進歩の主な源泉であるのである。

以上述べ來つた所によつて生活が外界の束縛に對して内界の獨立を獲るに至  
ることを知ることが出来る而して個人の生活が全體に推擴めらるゝことも既に  
見た所である惟ふにこの兩者は密接な關係を有して離るべからざるものである  
何故かと云へば吾々が全體に達するのは唯内界から起る所の有力な勤勞により  
而して又さう云ふ勤勞は生活が全體に推擴められなければ起つて來ることが出  
來ないからであるつまりこの兩者は自然の連續に過ぎない精神生活とは全く異

つた性質を有つてゐる所の生活の二方面なのである人間に特有な働が文化となつて現はれて來るのであるが其の文化も自然に對して獨立な地位を吾々に與へなかつたならば何の役にも立たないものとなつて了ふしてまた人間の努力をして唯外界に向はしむるのみであつて自分の本質の向上に向はしめなかつたらば其の文化は平板空虚なものとなつて了ふ文化作業は人が其の中に眞の我を覓める時に於いてのみ眞理であり力あるものであるのだ。

吾々の精神中に自然に對して新しい生活が起つて來ると云ふことは種々の現象の示す所で何人も承認せざるを得ぬ所であるが此等の現象を包括して全體として之を見而して其の意義を問ふ段になると困難な問題が生じて來るのである新らしい生活は明かに唯自然に添加したものであるもなければ自然を漸々に作り上げたものでもないまた思惟とか感情とか云ふ一つ一つの精神力の成果でもない實に全く新にして全體を爲せるものなのであるがさう云ふ生活は如何にして吾吾に起つて來るのであらうか此の疑問を解かうと云ふにはどうしても精神生活の中に於いて人間に優越した世界生活ウエルトレベインを認めざるを得ない。

(未完)

講演

イスパニア大艦隊破滅談

箕作元八

(一)

歴史家の泰斗のレオポルド・フォン・ランケが斯ういふことを言つて居ります。「航海と隣人間の争闘」とに依て人間は發達成熟する運命を持つて居る。是は誠に能く達觀した言でありまして、海は非常に歴史上に大切な意味を有つて居りまして、隣人間の争といふことについても、隣人といふものは陸続きでありますれば、直ぐ土地の密接した國の人々であります。海であると數千里を隔つたものでも互に隣人の様な關係になつて、相互に平和的關係、又は戰鬪的關係を以て色々影響を與へて居るのでございます。それ故に世界歴史を能く通覽しますといふと、海の事に關係したことが一番大

講演

きな結果を生ずるのでありまして、海を中心とすれば影響が大變に廣く行くことが出来る。それ故に海の争といふものはズツと昔からあるのでありまして、太古には、フェニキア人が海上を支配して居たのでありますが、それからギリシア人が起り、カルタゴ人が起り、ローマ人が起り、カルタゴとローマとの間に、非常な大きな世界的海上覇業の争が起り、終にローマの勝に歸した。

それから後、暫く中世の頃は海事は大に怠られ、従つて大規模の貿易等が發達せず、總ての世の有様が退歩したのでありましたが、中世の末即ち第十五世紀の末から、再び海上の活動が起りまして、所謂地理大發見時代といふ時代になりまして、ポルトガル、イスパニアの二國の國民が第十六世紀に於て海上に雄飛したのであります。それからこの二國民と大に競争して海上に覇を争つたのがオランダ、イギリスであります。オランダは十七世紀には海上第一の勢力を握ることになつた。次いでオランダと競争して、第十七世紀の末